



JOHANN
SEBASTIAN
BACH

THE FRENCH SUITES
BWV 812-817

ANDREA
BACCHETTI
piano

J.S. バッハ

Johann Sebastian Bach (1685 - 1750)

フランス組曲(全曲)

THE FRENCH SUITES BWV 812 - 817

DISC 1 66:16**フランス組曲 第1番 二短調 BWV812 16:57**

Suite No. 1 in D minor BWV 812

1	I. アルマンド	Allemande	3:47
2	II. クーラント	Courante	2:00
3	III. サラバンド	Sarabande	3:24
4	IV. メヌエットI	Menuet I	1:23
5	V. メヌエットII	Menuet II	2:23
6	VI. ジーグ	Gigue	3:58

フランス組曲 第2番 八短調 BWV813 15:06

Suite No. 2 in C minor BWV 813

7	I. アルマンド	Allemande	3:04
8	II. クーラント	Courante	2:07
9	III. サラバンド	Sarabande	3:26
10	IV. エア	Air	1:45
11	V. メヌエット&トリオ	Menuet & Trio	1:56
12	VI. ジーグ	Gigue	2:44

フランス組曲 第3番 口短調 BWV814 17:56

Suite No. 3 in B minor BWV 814

13	I. アルマンド	Allemande	3:39
14	II. クーラント	Courante	1:55
15	III. サラバンド	Sarabande	3:19
16	IV. アングレーズ	Anglaise	1:45
17	V. メヌエット&トリオ	Menuet & Trio	3:59
18	VI. ジーグ	Gigue	2:15

フランス組曲 第4番 変ホ長調 BWV815 17:17

Suite No. 4 in E-flat major BWV 815

19	I. アルマンド	Allemande	2:40
20	II. クーラント	Courante	2:04
21	III. サラバンド	Sarabande	5:03
22	IV. ガヴョット	Gavotte	1:17
23	V. メヌエット	Menuet	1:02
24	VI. エア	Air	2:29
25	VII. ジーグ	Gigue	2:38

アンドレア・バッケッティ(ピアノ) 使用ピアノ：ファツィオリ・グランドピアノ・モデルF278

Andrea Bacchetti, piano

録音：2011年3月、イタリア、サチーレ、ファツィオリコンサートホール

**DISC 2 55:48****フランス組曲 第5番 ト長調 BWV816 17:56**

Suite No. 5 in G major BWV 816

1	I. アルマンド	Allemande	3:14
2	II. クーラント	Courante	1:55
3	III. サラバンド	Sarabande	4:28
4	IV. ガヴョット	Gavotte	1:17
5	V. プール	Bourrée	1:37
6	VI. ルール	Loure	1:48
7	VII. ジーグ	Gigue	3:35

フランス組曲 第6番 ホ長調 BWV817 17:46

Suite No. 6 in E major BWV 817

8	I. アルマンド	Allemande	3:28
9	II. クーラント	Courante	1:45
10	III. サラバンド	Sarabande	3:40
11	IV. ガヴョット	Gavotte	1:15
12	V. ポロネーズ	Polonaise	1:47
13	VI. プール	Bourrée	1:34
14	VII. メヌエット	Menuet	1:29
15	VIII. ジーグ	Gigue	2:44

ボーナス・トラック**BONUS TRACKS:****バルティータ 第2番 八短調 BWV826 20:06**

Partita No. 2 in C minor BWV 826

16	I. シンフォニア	Sinfonia	4:46
17	II. アルマンド	Allemande	4:13
18	III. クーラント	Courante	2:13
19	IV. サラバンド	Sarabande	3:15
20	V. ロンドー	Rondeau	1:42
21	VI. カプリッチョ	Capriccio	3:53



Johann Sebastian Bach
(Eisenach, 1685 - Leipzig, 1750)

THE FRENCH SUITES - BWV 812-817

FAZIOLI

Pianoforte
Andrea Bacchetti

Piano / Strumento / Klavier
Fazioli Grand Piano Model F278

Recording / Registrazione / Aufnahme / Enregistrement
Sacile, Fazioli Concert Hall, March 2011

Balance engineers / Ingegneri del suono
Toningenieur / Ingenieurs du son
Gabriele Robotti, Matteo Costa

Executive producers / Produttori esecutivi
Directeurs de Production
Luciano Rebbigiani / Mario Marcarini

Photographers / Referenze fotografiche
Fotonachwies / Références photographiques
Foto Raf | www.fotoraf.com

Graphic design / Progetto grafico
Grafiches Layout / Maquette
Laura Casale | lau.casale@yahoo.it

Special thanks to
BANCA CARIGE, Genova, Italy

饒舌と静寂の間に歌い上げるバッケッティのJ.S.バッハ

池田卓夫

2014年7月10日、東京・銀座のヤマハでアンドレア・バッケッティにインタビューをした。イタリア語通訳の女性が「ちょっと待って!」と何度ストップをかけても「言葉の機関銃」の勢いは衰えず、一つの質問に多くの言葉を連ねて答えようとするうち、どんどん脱線していく。部屋にはピアノが置いてあり、言葉だけで説明できない内容だと、急に立ち上がって楽器に突進する。弾きながらまた、しゃべる。通訳の方も私も、最後は頭がくらくら。疲れてしまった。

4日後、小石川・トッパンホールのリサイタルではJ.S.バッハとモーツァルトを弾いた。繰り返しをすべて省き、20数分の超高速で唖然とさせた「ゴルトベルク変奏曲」はともかく、アマデウスとはどこか趣を異にする饒舌のハ長調K.330のソナタに首をかしげるうち、正規のプログラムは8時半前に終了。本人が「まだ、かなり時間があるので」と話しかけ、ポプリ(接続曲)のように弾いた「フランス組曲第5番」その他のバッハ作品群こそ、あの晩の白眉だった。饒舌が小宇宙を造型して(矛盾するようだが)究極の静寂を獲得した瞬間、バッケッティのバッハは輝きはじめ、聴衆に対

しても独自の世界観を納得させる。

「現代(モダン)ピアノで奏でるバッハ」。ピリオド(作曲当時の仕様の)楽器のチェンバロ、クラヴィコード、フォルテピアノなどが復興して以降、多くのピアニストが直面せざるを得なくなった課題である。クラウディオ・アラウといえれば1935年のベルリンで音楽史上初めて、バッハの全鍵盤作品の連続演奏会を実現した大ピアニストだが、40年代半ばにワンダ・ランドフスカのチェンバロ演奏に触れ、ピアノでのバッハ演奏を封印してしまった。アラウがニコラウス・アーノンクールやグスタフ・レオンハルトらピリオド派の主張にも目を配りつつ、ピアノでのバッハ演奏を再開したのは死の年の91年。6曲の「バルティータ」のうち4曲まで録音したのが、ラストレコーディングとなった。

アラウより遥かに若いバッケッティによれば、「グレン・グールド、マレイ・ベライア、アンドラーシュ・シフ、アレクサンドル・タロウら多くのピアニストがバッハに取り組み、モダンピアノによるバッハ演奏は一つの様式を確立している」という。バッハ自身、ピアノの原型に当たるクリストフォリの楽器をあまり好まなかったとの話もあり、「もしバッ

ハが進化の完成形にある今日のピアノに出会った
ら、また別の曲を書いていたのではないかと、い
ささか大胆な推理もする。「バッハのフーガはそ
れだけ、桁外れの現代性を備えているんだ」。

バッケッティは「現代のピアニストに求められる
課題」として(1)モダンピアノだからこそ可能な
表現、(2)チェンバロやクラヴィコード以来のバッ
ハの演奏様式の2点のコンビネーションを熟慮し
ている。中でも注意を払うのは、ペダリング。シ
フやフランチェスコ・トリスターノのようにバッハで
ノンペダルに徹するピアニストもいるが、バッケッ
ティは「グールドさえ、ペダルを使っていた」といい、
「自分は使っているのがわからない程度に使うの
がいいと思う」と考える。「10本の指だけじゃあ、
音全部がつかないからね」と笑う。

特に中間のペダル(ソステヌート・ペダル)が、
バッケッティには重要らしい。「2声の曲であって
も真ん中のペダルをうまく使えば、3声のように響
く」と主張する。和声の構造はバッハがすべて書
いているので、ペダリングによって自分の解釈を
打ち出す。「どう使うかはライブの瞬間ごと、本能
的に決める」。

かつてアーノンクールにインタビューした時、
一部のピリオド楽器演奏家が自負する「オーセ
ンティック(正統派)」という言葉を激しく拒絶す

るのが印象的だった。いわく「バッハのオーセ
ンティックな演奏とは、バッハの自作自演でしかあり
得ない。残念ながらバッハ自身の録音は残ってい
ないので、現代の演奏家それぞれが真実を究め
ようともがいている。オーセンティック・アプローチ
などと自負するのは、ドグマ(独断)でしかない」。

バッハの鍵盤作品は(1)自身のヴィルトゥオー
ジティ(名技)や実験精神を最大限に発揮できる
もの、(2)技よりはギャラントな味わいに重点を
置いたもの、(3)家族や生徒の教育用素材とし
て書かれたもの——などに大別される。このバッ
ケッティの2枚組にもギャラントな「フランス組曲」
全6曲、「クラヴィーア練習曲集第1巻」に含まれ
る「バルティータ第2番」と、二つの異なる側面が
一つに収められている。

バッケッティは非常に美しい音を駆使し、様々な
舞曲の連続といえる作品群を克明に弾き分ける。
全体を支配するのは、ロマンティックと形容できる
ほどの歌心を感じさせながらも、18世紀音楽の様
式を決して踏み外さない節度である。「エドウィン・
フィッシャーやカール・リヒターらのバッハ演奏が
体現した、「大きな音楽」を自分は目指したい」と
も。バッケッティにおける奔放と厳格の奇跡的両
立は、不思議なほどの静謐を醸し出している。

(いけだたくお=音楽ジャーナリスト)

アンドレア・バッケッティによる2つのプロジェクト

マリオ・マルカリーニ

アンドレア・バッケッティは早くから自分の演奏を録音することに関心を持ち、録音の機会があるとそれを最大限に利用するようになってきた。CD化されたバッケッティの最も若い時期の演奏は、1996年、19歳でルツェルン音楽祭に出演し、ルドルフ・バウムガルトナー指揮ルツェルン祝祭合奏団と共演したモーツァルトのピアノ協奏曲第12番と思われる。1999年からはほぼ自主制作に近い形でソロ・アルバムを制作し始め、2000年代に入ってから、Artsレーベルへのクレメンティの「グラドゥス・アド・バルナッサム」全曲録音にピアノニストの一人として参加したことをきっかけに、イタリアのさまざまなレーベルからCDを発売するようになった。セッション録音のみならず、演奏会でライブ収録された音源も様々な形で世に出ている。

われわれソニー・ミュージック・イタリアがバッケッティによるアルバムを初めて制作したのは2006年7月、ケルビーニが生涯で最初に出版したピアノソナタ6曲を収録した時のことである。この時は国際ケルビーニ協会の全面的な協力を得て、自筆譜を始めとする原典資料を参照すること

ができた。そしてそこから新たにバッケッティと私が編集した楽譜に基づいて録音を行なうことで、ケルビーニという作曲家に新たな光が当たり、高い評価を得ることとなった。

これを起点とし、18世紀イタリアの作曲家のピアノ曲を、原典資料から新たに掘り起こして録音するというプロジェクトが始まった。翌2007年には第2弾としてガルツピのピアノソナタ集、2010年には第3弾としてベネデット・マルチェッロのピアノソナタ集、2012年には第4弾としてドメニコ・スカルラッティとソレルのソナタ集、そして2014年にはその第5弾としてヨハン・アドルフ・ハッセのソナタ集を録音してきたのである。ヴェネツィアの国立マルチャーナ図書館（スカルラッティ、マルチェッロ）、ウーゴおよびオルガ・レーヴィ財団、ヴェネツィア音楽院図書館、プレツィアのクラ・マレンツィオ音楽院、ポローニャ博物館および音楽図書館（ガルツピ）などに保管されている作曲家の自筆譜やごく初期の筆写譜を広く渉猟し、そうした場所で発見した原典資料をもとにして録音を行なった。これら18世紀の鍵盤音楽は、バッケッティにとって秘められた宝のようなもので、その

魅力を少しでも広く聴いてもらうべく、録音プロジェクトのみならず、演奏会においても、チマローザからルチアーノ・ベリオにいたるイタリアが生み出したピアノ曲のみで構成したプログラムを披露することもある。

この録音プロジェクトと並行して、われわれは、2011年から音楽家バッケッティにとって最も重要な作曲家であるヨハン・セバスティアン・バッハのクラヴィア作品の全曲録音プロジェクトを開始した。これが「バッハ・エディション」である。バッケッティはバッハの作品を何よりも愛してやまず、バッハが残した全てのクラヴィア作品を演奏し録音することが長年の夢であり、これまでもDeccaやDynamicといったレーベルにバッハ作品を録音してきたが、今回の「バッハ・エディション」では、オルガン曲を除くクラヴィア独奏曲の全てを網羅し、バッケッティのこれまでのバッハ演奏の総決算とするべく、強い意気込みでプロジェクトを進めている。

「バッハ・エディション」の第1弾は2011年3月に収録した「フランス組曲」全曲で、CD2枚組の余白には同時に収録したトッカータBWV914とバルティータ第2番を収めた。「バッハ・エディション」第2弾は「イタリア様式のバッハ」で、2013年4月に収録された。

なお日本での発売は第2弾「イタリア様式のバッハ」が先となった。2014年7月のバッケッティの来日公演に合わせ、「イタリア様式のバッハ」の日本での発売にあたっては、前記18世紀イタリアの作曲家のアルバムからの選曲、「バッハ・エディション」の第1弾「フランス組曲」からのフランス組曲第5番、トッカータ ホ短調を加えたディスクとを合わせた2枚組という形で発売されたからである。

バッケッティによる「バッハ・エディション」はその後、「ゴールドベルク変奏曲」(繰返しと装飾を入れたヴァージョンとシンプルなヴァージョンの2種類の演奏を収めた2枚組になる予定)、ヴィヴァルディらイタリア人作曲家の作品の編曲を収めた「イタリア様式のバッハ第2集」、RAI(イタリア放送)交響楽団を弾き振りしたクラヴィア協奏曲全集、そして「イギリス組曲」全曲を、これからの3年間で収録・発売していく予定である。

[2014年11月改稿]

■曲目解説

J. S. バッハ: フランス組曲 (全曲)

1802年は、ヨハン・セバスティアン・バッハによるチェンバロのための6つの組曲(BWV812~817)が、今日知られている《フランス組曲》というタイトルで呼ばれるようになる上で大きな意味を持つ年となった。初めて重要なバッハの伝記を著したドイツの音楽学者ヨハン・ニコラウス・フォルケル(1749~1818)が、この年、これらの組曲が多くの場合に「フランス風の組曲」すなわち「フランス組曲」と呼ばれるのは、その作曲にあたってバッハはフランス様式からインスピレーションを得たからだと書いたのである。

当時のドイツでは「フランス風」とか「フランス様式」といった言い方はすでに十分に定着していた。それは、もっと早くから、作曲家で批評家でもあるフリードリヒ・ヴィルヘルム・マールブルク(1718~1795)がそのような用語を使って土台を築いていたからで、マールブルクのそのような表現はバッハという大巨匠の能力と才能に対する賛美の念から生まれたものだった。マールブルクにとってバッハは、ドイツ古来の鍵盤楽器の伝統をマスターする能力を持っていた(彼の堂々たるトッカータやフーガ、変奏曲、カノンが見事に示している)ばかりか、諸外国の様々な音楽様式を

もわがものとし、それらを鍵盤楽器に移植する才能にも恵まれていた。バッハのそんな才能をはっきりと表しているのが、驚くべき《イタリア協奏曲》(BWV971)や《リュリ風の序曲》(《フランス風序曲》BWV831を指す)であり、あるいは「組曲」と呼ばれる、舞曲の形を借りた練習曲であった。組曲は3つのグループにはっきりと分けることができ、その中にはフランス風のものだけでなくイギリス風の組曲(BWV806~811)も、さらには「ドイツ風」と呼ばれる組曲(《6つのパルティータ》BWV825~830)も含まれているというわけである。

実際のところは、BWV812~817の6つの組曲にはフランス様式だけでなく同時にイタリア様式からの影響も見られることは音楽学の先進的研究も認めるところであり、そのことは、現代における最も傑出したチェンバロ奏者・指揮者にして影響力の大きい音楽学者の1人でもあるクリストフルセ(1961~)が最近の文章の中で明らかになっている通りだが、それでも、《フランス組曲》を形作っている6つの組曲それぞれの構造的な形態がフランスからインスピレーションを得ていることは明らかである。すなわち当時の組曲の標準的な構成(アルマンド-クーラント-サラバンド-ジグ)の中に、バッハは、メヌエット、ガヴォツ

ト、ブーレ、ルールといったヴェルサイユ宮殿で当時流行っていた様々な舞曲を挿入しているのである。

バッハがフランスのクラヴサン音楽の様式に精通していたのは間違いない。すでに幼い頃に家族を通じて教わる機会があっただろうし、何よりも10代になって北ドイツの都市リュネブルクで過ごした時期に親しんだ。リュネブルクでバッハはたぶんフランス語も学んだと思われる。また、そのリュネブルク時代に、バッハがリュネブルクから80キロほど南に下ったツェレという小都市を何度か訪れたことも分かっている。当時のツェレではブラウンシュヴァイク＝リュネブルクの領主ゲオルク・ヴィルヘルム公がフランス趣味の宮廷を構え、フランス風の宮廷オーケストラが設けられていた。とはいえ、《フランス組曲》が生まれるまでにはそれから15年近い歳月が必要だった。バッハがこれら6つの組曲を作曲したのは、彼がアンハルト＝ケーテンの領主レオポルト公の小宮廷で過ごしていた時期(1717年から1723年まで)の最後の頃と思われる。ケーテン宮廷は教会音楽をそれほど重視しないカルヴァン派に属しており、聖歌隊もなければ礼拝の際にオルガンを使うこともなかったのも、ケーテン時代のバッハは器楽と世俗音楽に力を振り向けることが

できた。このような環境の中で、のちに《フランス組曲》と呼ばれることになる、長い、手の込んだ6つの組曲が生まれたのだった。確かに、姉妹作の《イギリス組曲》と比べると、構成的にも(《イギリス組曲》にはあったプレリュードがない)、純粋に技術的な面だけを見ても、それほど入り組んだ音楽ではないけれども、それでも《フランス組曲》は、うっとりするような美しさを持つ旋律——その最初の着想を得たバッハが、いかにも彼らしい名人芸と形式への気配りで練り上げたのは明らかだ——など、《イギリス組曲》に劣らず魅力的な作品であることに変わりはない。

6つの組曲のうち、第1番～第3番の3曲は短調で、第4番～第6番の3曲は長調で書かれている。また、各組曲内の楽章数(曲数)は、第1番～第3番が6楽章、第4番～第5番が7楽章、第6番が8楽章となっている。どの楽章も舞曲の様式を借りてはいるが、もちろん踊ることを意図した音楽ではない。大まかに言って、最初の3つの組曲は、短調の使用ということもあって、後半3曲よりもはっきりと地味で内省的な性格を示していると言える。

バッハによる類似の他の作品と比べて演奏上の難所が少ないことは、《フランス組曲》が教材として使われたという仮説を補強していると言え

よう。「アンナ・マグダレーナ・バッハのための音楽帳」と「ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのための音楽帳」に《フランス組曲》の一部が書き込まれていることはその証拠と言っていかもしれない。それゆえに、バッハの弟子たちの間で多くの写譜が作られたことも、《フランス組曲》の普及にある程度まで貢献したに違いない。こうして《フランス組曲》は今日、コンサート・プログラムの定番となるとともに、ほとんどすべてのピアニストのレパートリーに収まって、親しまれている。

ボーナストラック

バルティータ 第2番 八短調 BWV826

《6つのバルティータ》BWV825～830はバッハの一連のクラヴィア組曲集の集大成的作品。1726年～30年にかけて順次作曲・出版され、1731年に「クラヴィア練習曲集第1巻（第1部）」[作品I]として6曲合わせて出版された。楽譜扉には「クラヴィア練習曲集。プレリュード、アルマンド、クーラント、サラバンド、ジグ、メヌエット、その他の典雅な楽曲を含む。愛好人士の心の憂いを晴らし、喜びをもたらさんことを願って、ザクセン＝ヴァイセンフェルス公宮廷現任楽長ならびにライブツィヒ市音楽監督ヨハン・セバスティアン・バッハ作曲。作品I。私家版。

1731年」と記されている。当時の組曲の標準的な構成（アルマンド－クーラント－サラバンド－ジグ）の冒頭にプレリュード的な楽章（この第2番では「シンフォニア」と題されている）を加えて作品の規模を拡大していることが大きな特徴で、メヌエット、バスピエ、ガヴョット、スケルツォなどの舞曲を加えているのは《フランス組曲》と同様である。

マリオ・マルカリーニ (訳:渡辺 正)

[マリオ・マルカリーニは1971年ミラノ生まれ。大学時代に歌と音楽学を学ぶ。現イタリアのソニー・ミュージック・レーベル・マネージャーで、アンドレア・バッケッティやバロック・アンサンブル「シレーテ・ヴェンティ」などの録音の制作を担当している。]



アンドレア・バッケッティ

1977年、イタリア、ジェノヴァ生まれ。早くから音楽の才能を示し、4歳でピアノを学び始める。ジェノヴァ・バガニーニ音楽院、ザルツブルク・モーツァルトウム、バリ高等音楽院で学ぶ。ザルツブルクでは指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンの目にとまり、貴重なアドバイスを受ける。11歳でミラノにおいてクラウディオ・シモーネ指揮イ・ソリスト・ヴェネチアとの共演でプロデビュー。ルドルフ・パウムガルトナー率いるルツェルン祝祭合奏団とは、ルツェルン音楽祭への出演を含むヨーロッパツアーを行なう。ルツェルンでは名ピアニスト、ミエチスラフ・ホルショフスキの知己を得、薫陶を受ける。また同じく名ピアニストであるニキタ・マガロフにも称賛を受けた。イモラ音楽アカデミーでのマスタークラスを終えて、国内外で本格的な演奏活動を開始。1996年プレミオ・ヴェネツィア・コンクール、2006年ウンベルト・ミケーリ・コンクール入賞。作曲家ルチアーノ・ベリオに認められ、2000年から2001年にかけて作曲家監修のもと、1990年までに作曲されたベリオのピアノ独奏曲全曲をDeccaに録音(2004年発売)。

レパートリーはバッハから20世紀作品まで幅広く、特にバッハのクラヴィア曲は最も重要なレパートリーであり、中でも「ゴールドベルク変奏曲」を好んで取り上げている。そのほかソロ・リサイタ

ル・協奏曲のレパートリーとしては、ベートーヴェン(ソナタ第1番～第3番・第30番、ピアノ協奏曲第2番・第4番)、モーツァルト(ピアノ協奏曲第4番・第7番・第9番・第11番～13番・第17番・第27番)、メンデルスゾーン(ピアノ協奏曲2曲、華麗なるカプリッチョ)、シューマン、ショパン(練習曲全曲、即興曲全曲ほか)、フランク(交響詩「鬼神」、交響的変奏曲)、リスト、ブラームス(作品79・作品109・作品116)、グリーグ(ピアノ協奏曲)、スクリャーピン、ラフマニノフ(音の絵、前奏曲集)、プロコフィエフ(ソナタ第4番)、ドビュッシー(喜びの島)、ショスタコーヴィチ(ピアノ協奏曲第1番)、ガーシュウィン(ピアノのための前奏曲)、そしてチマローザからベリオにいたるイタリア人の作曲家によるピアノ作品などがある。

録音にも早くから積極的で、Arts Music(クレメンティ: グラドゥス・アド・バルナッサム、メンデルスゾーン: ピアノ協奏曲第1番、華麗なるカプリッチョ、華麗なる Rondò ほか [プラハ室内管弦楽団の弾き振り、2004年録音])、Decca(バッハ: イギリス組曲全曲 [2005年録音]、ベリオ: ピアノ独奏曲全曲 [2000年～2001年録音])、Dynamic(バッハ: インヴェンションとシンフォニア全曲、フランス組曲第6番、バルティータ第2番、前奏曲集 [以上2008年録音]、ゴールドベルク変奏曲 [2010年11月録音]、トッカータ全曲 [2010年10月、12月録音]、モーツァルト: ピアノ協奏曲第

11番～第13番【ゴールドスタイン指揮バドヴァ・ヴェネット管、2010年録音】などのレーベルに多数のアルバムを発表しているほか、Arthausからは映像による「ゴールドベルク変奏曲」(2006年ヴィチエンツァで収録、ボーナスCDとして2007年サヴォーナでのライブ録音付き)をリリースしている。

2006年からイタリア・ソニーに録音を開始。RCA Red Sealレーベルには、ケルビーニ(2006年録音)、ガルツピ(2007年)、ベネデット・マルチェッロ(2010年)、ドメニコ・スカラッティ(2012年)、ヨハン・アドルフ・ハッセ(2014年)とイタリアの作曲家による作品集を手稿譜や筆写譜に基づいて録音するプロジェクトを継続する一方で、2011年にはSony Classicalレーベルに、バッハのクラヴィーア曲の全てを録音する「バッハ・エディション」を開始している。

2005年初来日。2012年にはファビオ・ルイーゼの推薦でパシフィック・ミュージック・フェスティバルに出演し、モーツァルトのピアノ協奏曲第17番と室内楽を演奏、「バックウッティは天才ピアニスト」と絶賛を博す。2014年7月、日本での初のリサイタル・ツアーを行なった。

オフィシャル・ホームページ

<http://www.andreabacchetti.net/>

(2014年11月)





アンドレア・バッケッティ・ディスコグラフィ

バッハ・エディション ①



イタリア協奏曲

～バッケッティ・プレイズ・バッハ

DISC 1

《イタリア様式のバッハ》

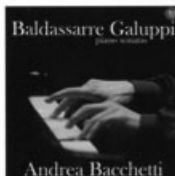
DISC 2

《バッケッティ・プレイズ・バッハ、
スカラルラッティ、マルチェッロ、ガルツピ》

SICC 30167-8

[録音・2007年、2010年4月、2011年3月、
2012年9月、2013年4月]

イタリアの作曲家による鍵盤音楽作品集



ガルツピ:ピアノ・ソナタ集(8曲)

手稿譜に基づく世界初録音

1CD 88697367932(輸入盤)

[録音・2007年]



ベネデット・マルチェッロ:

ピアノ・ソナタ集(7曲)

手稿譜に基づく世界初録音

1CD 88697814662(輸入盤)

[録音・2010年]



ヨハン・アドルフ・ハッセ: ソナタ集

1CD-88883725202(輸入盤)

[録音・2014年]



ドメニコ・スカラルラッティ: ソナタ集(10曲)*

ソレール・ソナタ集(4曲)

*ヴェネツィア国立マルチャーナ
図書館所蔵の縮写譜に基づく
世界初録音

1CD-88765417242(輸入盤)

[録音・2012年]

輸入盤は輸入館取扱店でお客様下さい。

(2014年11月)

【取り扱い上のご注意】●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、乾いた柔らかい布で内面から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、または録音剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。**【保管上のご注意】**●直射日光の当たった場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●ケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

ご購入いただいた商品に関するお問い合わせ：株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント
〒102-8353 東京都千代田区六番町4番地5 phone 03-3515-5111



SICC 30198-9 / STEREO

©&© 2012 Sony Music Entertainment Italy S.p.A.

Manufactured by Sony Music Labels Inc. Made in Japan. ℗ is a Registered Trademark of Sony Corporation.
WARNING: All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.